

書き換えた小説例

丘の上に立つ少女

夏休みには、集中的にレッスンすることになっている。ここで課題曲を完成させ、九月の発表会へとつなげていく。私は厳しい態度で生徒たちに向き合う。それが、生徒たちを成長させる。私は、自分の音楽家活動とピアノ教室を両立させている。生徒たちへの指導にも妥協はしない。私の指導は厳しすぎるとか、子どもの扱いに偏りがあるとかよく親御さんからお叱りを受ける。でも、それは仕方のないことなのだ。ピアノの上達には、日頃の練習量が欠かせないし、生徒の才能をひきだしてこそピアノの教師といえる。だから、私と気持ちが合わなかったり、続けていけそうもなかったりする生徒には、直接私の気持ちを告げるようにしている。

そんなやる気のはっきりしないひとりの生徒に、今日は話をしなくてはならない。彼女は、小学校の入学当初から私の所に通ってきている。しかし、一向に上達しそうにない。ピアノに対する気持ちもはっきりしない。他の生徒は早めに練習を終えて先にかえし、彼女が来るのを待っていた。少し遅れてきた彼女への話のきっかけに紅茶を入れてはみたけれど、いつもの居間では気が減入るだろうと、その場の思い付きで散歩に誘った。暑い日だった。彼女は怪訝そうに私の後についてきた。町のはずれにある丘を登り切ったところで、私は彼女に話しかけた。「あなたはもう、ずいぶん私の教室に通っているわね。でも、いくらがんばったってだめなのはだめのよ、分かりますか？」と、日頃からこの子に感じている気持ちを、率直に告げた。これからも彼女がピアノを続けていくかどうかは分からない。彼女自身がこの後どう奮起するか、しないかは自身が決めることだ。

その時、彼女ははじめ何を言われたのか、すぐには分からなかったようにきょとんとして此方を見つめていた。初めて私と目を合わせたようだった。やがて彼女は静かに頷いた。「わかりました。」とひとこと言って、去って行った。